

虹の谷のアン

モンゴメリ・村岡花子訳



新潮文庫

Title: RAINBOW VALLEY

Author: Lucy Maud Montgomery

Copyright © 1919 by Harrap Publishing Group Ltd.

Japanese language paperback rights arranged

with Harrap Publishing Group Ltd., Ltd.

through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

虹の谷の

—第九赤毛のア—

新潮文庫



昭和三十四年五月二十五日 発行
平成元年二月二十五日 五十五刷改版
平成二年十一月十日 六十五刷

訳者 村岡花子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替 東京四一八〇八番
価格はカバ―に表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社 製本・有限会社加藤新栄社

© Midori Muraoka 1959 Printed in Japan

新潮文庫

虹の谷のアン

―第九卷のアン

モンゴメリ
村岡花子訳



新潮社版

1281

虹の谷のアン

―第九赤毛のアン―

第一章 帰郷

それは青々とした五月の夕暮^{ゆぐれ}だった。フォア・ウインズ港には、金色のゆうやけ雲がうつり、海は悲しげに低く呟^{つぶや}いていた。だが港の赤土道にはそよかぜがたのしそうに、ミス・コーネリアのゆつたりとした、かつぶくのよい姿を、吹きすぎていった。ミス・コーネリアはグレン・セント・メアリーの村へでかけていくところだった。彼女の名は、マーシャル・エリオット夫人というのがほんとうで、エリオット夫人になつてからもう十三年にもなるのだが、いまだにたいいていの人は元の名前のほうがいいと思うらしく、ミス・コーネリア、ミス・コーネリアと呼ぶのだった。ただ一人だけ例外があつた。それは^{イシヤイト}炉辺荘^{（訳注）}（^{の新しい大}きな家^{アン}）の、氣むずかしやで忠義者の婆^{ばあ}や、スーザン・ペーカーだった。スーザンは折さえあれば目のかたきのようにコーネリアを、マーシャル・エリオットの奥さん、エリオットの奥さんと呼び、しかも「あんたはさんざ奥さんといわれる身になりたがつていなすつたのだから、その報^{むく}いに、いやというほど奥さんとよんであげますよ」と言わんばかりに、刺^さすような強い口調で言うのだった。

ミス・コーネリアはイングルサイドへ、ドクター夫妻に会いにくところだった。夫妻はロンドンの医学会に出席するため、三月ほど留守にしていたのだった。その間にグレン村でおこった数々の事件、ことに今度、あたらしくうつてきた子だくさんの牧師一家のことを話したくてミス・コーネリアはうずうずしているのだった。

スーザンと、元のアン・シャーリー——今はアン・ブライスであるが——はイングルサイドの広いヴェランダにすわって、変わっていく夕景色とたそがれどきの楓の木の間で眠たそうにさえずる駒鳥と、芝生をかこむ古めかしい赤レンガの壁にそよぐ黄水仙の花をたのしんでいた。

アンは何人かの子供の母親とは見えないくらい娘らしく、美しい灰色の目には昔ながらの夢みるような表情をたたえて港街道を見おろしていた。アンの方の背後のハンモックには、六つになる、まるまると肥えたりラ・ブライスがびったり目をつむって眠っていた。

「蕉色の坊や」でとおっているシャーリーはスーザンにだかれて眠っていた。彼は髪の色も目も皮膚もみんな蕉色で、頬だけがまっかだった。そしてスーザンの秘蔵っ子だった。

「わたしは坊っちゃんのことじゃ、奥さんとおんなじぐらい苦労してきましたんですよ」とスーザンはいつも言っていた。シャーリーにしてもこぶをこしらえたと言ってはスーザンのところへ飛んでいき、寝つくのもスーザンの子守歌でなければだめだったし、ひどいいたずらでしおきをされそうになると、スーザンのところへ逃げていくのだった。スーザン自身も

ほかの子どもたちにはみんなしおきをしたが、シャーリー坊っちゃんにはけっして手をあげなかった。一度なんかブライス博士がシャーリーを平手で打ったのを「先生は天使にだって手をあげますよ、奥さん」と言つて憤慨し、ギルバートには一週間もパイを食べさせなかった。

ブライス博士夫妻のヨーロッパ旅行中、スーザンはシャーリーだけを自分の兄の家へ連れて行つて面倒をみていた。ほかの子どもたちはアヴォンリーへ預けられた。それにしてもスーザンはこうして再びブライス家の炉ばたで子どもたち全部にかこまれることでは大満悦であつた。このイングルサイドの炉ばたこそはスーザンの全世界であり、ここでは全権をふるうことができた。アンでさえもスーザンの決定には不賛成を唱えることはほとんどなかった。グリーン・ゲイブルスのレイチェル・リンド夫人はこれにはたいへんな不服で、フォア・ウィンズのこの家を訪問する度ごとに、アンに向かつて、スーザンをこんなふうにもしてしまつたら、将来、必ずお前さんが後悔するよと言つた。

「あれ、コーネリア・ブライアントが港街道をやつてきますよ、奥さん。きつと三月分の噂話をぶちまけにきたんでしようよ」とスーザンは言つた。

「ぜひ、きかせてもらいたいわ。あたし、グレン・セント・メアリー村の噂話にかつえきつてゐるのよ。ミス・コーネリアが何もかも洗いざらいぶちまけてくれるといいわね。こうしてまた、イングルサイドや、なつかしい村の人たちの中へ帰つてきて、しみじみうれしいと

思うの。だからみんながどうしているか、早く一切合財聞きたいのよ。そうそう、ロンドンでウェストミンスター寺院を歩いていた時だつて、ひよいと、ミリセント・ドリュウは結局あの二人の候補者のどっちと結婚けつこんすることになるかしら、なんて考えたのよ。あたしよつぽどゴシップが好きらしいわ」

「そりやもちろん、奥さん、ちゃんとした婦人なら誰だれでも新しいことは聞きたいのですよ。わたしはわたしでこのミリセント・ドリュウの事件には特別気をつけているのですよ。わたしは恋人こいびとなんてものは一人も持ったことはありませんし、ましてや二人の恋人なんか、お話のほかですが、今じゃそんなことは何とも思つてやしませんよ。年よりの独身者というの、なれてしまえば別にどうつてこともありませんからね。ミリセントの髪ときたらまるで箒ほうきで一本ならべに、はきたてたみたいじゃありませんか。でも男というものはそんなことにはかまわないと見えますね」

「男の人たちには、ただミリセントのきれいな、氣取つた、人を小馬鹿こばかにしたような小さい顔しか見えないのよ、スーザン」

「それもいいでしょうよ、奥さん。聖書にもあるじゃございせんか、あでやかさは偽りいつわであり、美しさはつかのまであるつてね（訳注 旧約聖書箴言三十一章三十節）。そうきまつてゐるならそれも仕方がありますかね。天国へ行ったら、みんな立派なエンゼルになるでしょうが、そんな時美人になつたつてどうにもなりやしませんよ。そら、コーネリア・ブライアントが門のところにき

ましたよ。では、この蔦色坊やを寢床に入れて編物でもはじめましょう」

第二章 村の噂うわさ

「ほかの子どもたちはどこですの」まず挨拶をすませるとミス・コーネリアはたずねた。

「シャーリーは寢床ねどに入っておりますし、ジェムとウォルターと双子は大好きな『虹の谷』にいつておりますの」アンは答えた。「あの子たちは今日の午後かえつてきたばかりなもので、食事がすむまで待ちきれずに谷へとんでいきました。あそこが世界じゅうのどこよりも好きらしいんですね」

「好きなものいいが度をこしてないかと思ひますね」とスーザンはむずかしい顔をして言つた。「いつかもジェム坊やぼやは、『僕、死んだら天国より虹の谷へいきたいや』つて言つてましたが、これは用心しなくてはいいけません」

「アヴォンリーでは、さぞ愉快ゆかいにすごしてきなすつたんでしょうね」ミス・コーネリアは言つた。

「とてもとても。マリラが子どもたちを甘やかすことといつたら。ことにジェムのことときたら、あの子がどんなわるさをしようと、マリラの目にはわるくはうつらないのですよ」

「クスパートさんも大分のお年でしようね」とミス・コーネリアは編物をとりだしながらたずねた。スーザンに負けないためである。

「マリラはもう八十五になりますのよ」とアンは吐息をついた。「髪も雪のように白くなつたし。でもおかしいことに目だけは六十の時よりずっと良いのですよ」

「そうですか。まったくあなた方皆さんかえつていらして、ほんとにうれしいですよ。ひどく淋しくつてね。もつともグレンに何も事がなかったというんじゃないですよ。実はね、教会のことではずいぶん、大変だったのです。そしてやつと、牧師さんがきまつたんですよ、アンさん」

「その牧師さんはジョン・ノックス・メレデイスさんといいなさる方なんですよ、奥さん」

ミス・コーネリアにばかり、新事件を話させるものかとばかりに、スーザンが言った。

「私たちはさんざ、あの人にするか、この人にするかと、候補者の説教を聞いちゃあ、詮議したんですが、どれもこれも皆、意見がまとまらないで、やつと皆がこの人ならと言ったのが、このメレデイスさんですよ。ところが、子どもが四人あんなさるんだけれど、これがねえ、どうも。別に悪い子どもだというわけではないんですよ。私もかわいいと思うし、誰にも好かれていますがね。ただ、そばについていて行儀をしこんだり、良い悪いの区別をおしえてやる者がついていければ、とても良い子たちなんです。学校じゃ、模範生だって先生が言いなさるくらいですからね。けれど家じゃあ、ただ飛びまわるばかり」

「メレデイスさんの奥さんでどんな方ですの」アンがたずねた。

「その奥さんがないんで、それで困るんですよ。メレデイスさんはやもめで、奥さんは四年前に亡くなつたんですとき。もし、それがわかつていたら、ここにきてもらわなかつたろうと思ひますね。やもめの牧師というものは、はなからの独身より、もっと始末がわるいものですからね。けれどメレデイスさんが『私の子どもたち』なんて言うものだからてつきり、子どもの母親もいるにちがいないと思つたんですよ。ところがいよいよやつてきたのをみたら、マーサ伯母さんとかいう年よりだけじゃありませんか。なんでもメレデイスさんのお母さんのいとこだそうで、養老院へいくところだったのをメレデイスさんがひきとつたんですってき。年は七十五だそうで、半盲で、耳は全然聞こえないし、変わった人らしいですよ」

「それにおつそろしく料理が下手ときてるんですよ、奥さん」

「牧師館のさいはいをふるにはこの上なしの不向きですよ」ミス・コーネリアは辛辣な口調で言つた。「メレデイスさんはマーサ伯母さんが氣をわるくするだらうからつて、けつしてほかの家政婦を入れようとはしないんです。アンさん、まったく牧師館の有様ときたら目もあてられませんかよ。ほこりが一インチもつもっているし、ちゃんとした場所においてある物は一つもなし。しかも私たちはあの人たちがくる前にペンキをぬるやら壁紙をはりかえるやらして、すっかりきれいにしておいたんですのにな」

「子どもさんは四人だとおつしやいましたわね」アンはもうその子どもたちに母親の愛情を

感じはじめていた。

「そうですよ。まるで梯子段はしごだんのようにつづいているのですよ。総領のジェラルドが十二で、皆はジェリーと呼んでいます、利口な子ですよ。フェイスが十一、この子はひどいお転婆てんぱですが、きれいなことは絵のようですね」

「見たところは天使みたいですが、いたずらにかけちゃ、おっそろしくなっちゃいますよ、奥さん」スーザンはきびしい口ぶりで言った。

「けれどかわいそうに、いつもしくじりばかりしかしているのですよ。とてもそそっかしくて考えなしですからね」

「ちようど、あたしみたいだわ。そのフェイスって子をあたしは好きですよ」とアンは言った。

「それでいてどこか人をひきつけるところがあるのですね。いつみても笑ってるもんで、ついこちらまで笑いたくなってしまうのですよ。その下のユナは十になる女の子で、きりようはよくないけれど、とってもやさしいかわいらしい子なんです。末のトーマス・カーライルが九つで、皆はカールとよんできますがね、がま蛙がまをやら甲虫かぶとむしやら赤蛙あかむしやらを、夢中むちゅうになつて集めちゃ家の中へもちこむんですからね」

「いつだったか、昼すぎにグラントの奥さんが訪ねていきなすった時、客間の椅子いすの上にころがっていた死んだ鼠ねずみだつて、あの子がどうかしたものにちがいありませんよ。奥さんはび

つくり仰天しちまいましたがね。無理ありませんよ。牧師館の客間は死んだ鼠のおき場所ではありませんからね。もつともあそこにおいては猫だつたかもしれないよ。あそここの猫ときたら悪魔みたいな奴ですからね、奥さん。牧師館の猫というものは、中身はどうあれ、みかけだけでも威厳をもっているべきだと私は思いますね。とにかくあんな放蕩者みたいなようすをした猫って、見たことがありませんよ。しかもほとんど毎日のように、日ぐれどきになると、牧師館の棟をのそのそ歩いちゃ尻尾をふるんですよ。あれはまったく感じがわるいですね」とスーザンが言った。

「何よりわるいことは、あの子たちが一度だつてきちんとしたみなりをしたことがないんですよ」とミス・コーネリアは溜息をついた。「そして雪がきえてからは、はだしで学校へいくんですからね。いくら何でも牧師館の子どものすべきことじゃありませんよ、ねえ、アンさん。ことに、メソジスト派のほうでは牧師の小さな娘が、いつもあんな立派なボタンのついた靴をはいているんですからね。それからね、あの子たちがメソジスト派の墓地で遊ぶことだけは、やめてもらいたいと思いますよ」

「墓地が牧師館にくつついていいますもの、そりゃあ遊びたくなりますよ」とアンは言つた。

「墓地で遊べたらどんなに面白いだろうって、あたし、いつも思っていましたもの。それよりどうしてあの牧師館を墓地のすぐ横手にたてたのでしょうかね。牧師館の芝生はとてもせま

いんですもの、墓地のほかには遊び場がないじゃありませんか」

「たしかにあれは失敗でしたよ」ミス・コーネリアもみとめた。「でもあそここの地所がとてもやすく手に入ったものですからね。しかも今まで、どの牧師さんの子どもだって、あそこで遊ぼうとした子なんか一人もいないんですからね。メレディスさんがあんなことをさせておくからいけないですよ。ところがあの人のはあの人で、家にさえいれば本に夢中なんですからね。読んで読んで読みまくるか、さもなければ思いにふけて書斎しよさいをぐるぐる歩きまわつてるかなんですからね。それでもこれまでのところでは日曜日に教会にくることだけは忘れませんからね。でも二回、祈禱会きとうかいをわすれてしまつて長老の誰かが牧師館へむかえにいったんですよ。それからファニー・クーパーの結婚式けつこんしきも忘れしましたしね。だもんであの人に電話をかけたら、どうでしょう、着のみ、着のまま、部屋用のスリッパのままで、つつ走つてきたんですよ。なにね、メソジストの連中があんなに笑わないなら、かまつたことじゃないんです。ところが一つだけ安心していいことがあるんですよ——メレディスさんのお説教には誰も指一本させないんです。メレディスさんは説教壇せつきょうだんにたつと、しゃんとして目がさめるんですよ。しかもメソジスト派の牧師は全然お説教ができませんんですよからね——という噂ですよ。少なくとも私はきいたことがありませんね。ありがたいことに」

ミス・コーネリアは「結婚してから、男性にたいする軽蔑けいべつはいくらか減つたようだったが」メソジスト派に対しての軽蔑はそのままで、みじんもようしやしなかつた。スーザンはずる

そうに微笑^{びしょう}して言った。

「ねえ、マーシャル・エリオットの奥さん、なんでもメソジスト派と長老教会派が合併^{がうびい}になるような話もあるそうじゃありませんか」

「そうですか。もしそんなことになるのなら私が死んでからにしてみたいですね」ミス・コーネリアはやりかえした。「どんな事があっても私はメソジスト派とかかわるのはごめんですね。メレデイスさんもあの連中をさけたほうがいいってことがわかるでしょうよ。まったくあの人ときたら、あまりにあの連中と行き来しすぎます。そうしてはいろんな失敗をしたり、人の気をわるくしたりするんですよ」

「ですが港口のアレック・デイビスの奥さんだけは怒^{おど}らせないでいてもらいたいですね」とスーザンが言った。「あの奥さんはとても怒りっぽい人らしいですが、ゆうふくにやっていて、牧師さんの給料は誰よりもたくさん、ほとんど全部引受けているんですからね。いつかもメレデイスの子どもたちみたいに育ちのわるい子は今までみたことがないって言ってますよ」

「とにかく、あの人たちがきてしまったからには、私たちもできるだけの事はつくして、メソジストの連中に対し、あの人たちの味方をしなくてはなりませんよ。さあ、もう帰らなくては。マーシャルがまもなく戻^{もど}るでしょうからね。ほかの子どもたちにも会われなくて残念でしたよ。なるだけ早くドクターと二人でいらして今度の旅行のことをすっかり話してください」